

第10回世界サルコイドーシス学会・第12回国際BAL学会 合同学会報告

広島大学病院 高度救命救急センター・集中治療部 大下慎一郎

2011年6月15～18日、オランダのマーストリヒトで、第10回世界サルコイドーシス学会（World Association of Sarcoidosis and Other Granulomatous Disorders; WASOG）は開催されました。今回は、3年前のギリシャ・アテネで開催された学会に続き、第12回国際気管支肺胞洗浄法学会（国際BAL学会）と同時開催される第2回目の合同学会でした。マーストリヒトは、オランダ南東端部に突き出るように伸びた場所にある都市で、ベルギーやドイツとの国境付近に位置しています。歴史的には、1991年、欧州連合（European Union：EU）の創設を定めたマーストリヒト条約が締結された場所として知られています。

私は、広島大学大学院分子内科学教室、河野修興教授のご高配で、2006～2008年の2年間、ドイツ・エッセンのUlrich Costabel教授の教室へ留学させていただきました。エッセンは、オランダとの国境付近に位置する都市ですので、エッセンからマーストリヒトまでは、自動車ですら約1時間半の距離です。そのためか、マーストリヒトは、どこことなくエッセンを思い出させてくれる街並みでした。今回のWASOG・BAL合同学会は、ヨーロッパ呼吸器学会（ERS）の後援のもと、オランダのDrent教授とCostabel教授の主催で開催されました。

学会進行と日本人参加者

今回のWASOG・BAL学会には、世界30ヶ国以上から275名の参加者がありました。最初に学会側が想定していたよりも学会参加者が増えたため、より大きなスペースが確保できるMECC Maastrichtへ会場を移しての開催でした。学会の進行は、おもに2つのホールを用い、教育講演を2題ずつ並行して行う形式でした。一般演題は、ポスター発表と口演がありましたが、約90%はポスター発表で、残る約10%が口演という配分でした。この点は、前回のアテネにおける第1回WASOG・BAL合同学会とほぼ同様でした。今回のWASOGは、オランダ国内の呼吸器学会とも同時開催だったためか、一般演題の約30%はオランダからの発表であり、それに続いて、アメリカとポーランドからの演題が約10%ずつを占めるという割合で

した。残りの50%には、日本、フランス、スウェーデンのほか、チェコ、セルビア、スロベニア、クロアチアといった中東欧諸国からの発表も見受けられました。

日本からは、北海道大学の服部先生・今野先生が、サルコイドーシス患者における喫煙の影響について、関西医科大学皮膚科の水野先生が、サルコイドーシス患者の皮膚病変について、愛知医科大学の高橋歩先生が、塵肺患者においてGM-CSF自己抗体が上昇していることについて、同大学の高橋大輔先生が、サルコイドーシス患者におけるSNP解析についてご発表されました。また、南カリフォルニア大学のOm P. Sharma教授の教室に勤務し、現在は呼吸器・救急・集中治療部のセンター長としてもご活躍しておられる重光先生が、急速進行性サルコイドーシスの臨床・病理学的特性についてご発表しておられました。私は、「びまん性肺胞出血症候群の予後因子としてのKL-6の有用性」について発表させていただきました。

教育講演・新しい話題

サルコイドーシスの発症素因については、ドイツのMüller-Quernheim教授がHLA class IIジェノタイプやHLA-DRB1など遺伝的素因の関与について、アメリカのNewman教授が遺伝素因と環境因子の相互作用について、同じくアメリカのDrake先生が抗酸菌の関与について、それぞれ講演されました。診断については、従来のHRCTのほか、癌の領域でしばしば用いられているFDG-PET/CT（フルオロデオキシグルコース陽電子断層撮影）の有用性についての講演がありました。治療については、アメリカのBaughman教授が、抗TNF療法であるインフリキシマブ、アダリムマブ、ゴリブマブ、ペントキシフィリン、Bリンパ球除去療法であるリツキシマブなどについて解説されました。とくに、サルコイドーシスのほか、ANCA関連血管炎、関節リウマチ、全身性エリテマトーデスなど、多くの自己免疫性疾患において、Bリンパ球調節障害の関与がクローズアップされており、Bリンパ球制御に関する講演だけで、1つのセッションが組まれているほどでした。

間質性肺炎に関する講演も充実しており、オランダのGrutters教授は、特発性肺線維症（IPF）におけるサーファクタント蛋白C、テロメラゼ逆転写酵素の遺伝的変異について、ドイツのCostabel教授は、ピルフェニドンやBIBF1120（VEGF・PDGF・FGF受容体阻害剤）など近年有望視されている新規薬剤の臨床試験結果、およびEgr-1やプロテアーゼ活性化受容体-2（PAR-2）といった新規治療ターゲットについて、それぞれ講演されました。いずれの領域の研究においても、遺伝的素因の研究は、ますます重要性が増している印象でした。

間質性肺炎の領域では、近年、BALの重要性について度々議論が重ねられていますが、今回のWASOGでも、間質性肺炎の診断にBALは必要か否かといった講演や発表が、いくつか見受けられました。2011年、アメリカ胸部学会（ATS）/ERS/日本呼吸器学会（JRS）/ラテンアメリカ胸部学会（ALAT）の4学会合同で発表されたIPFの診断・治療ガイドライン（Raghu G. AJRCCM 2011;183: 788）では、BALの有用性は「弱い推奨」と位置付けられており、どちらかと言うと、一般的には、BALの有用性に対して否定的な意見が多いのが現状です。しかし一方、WASOGでは、BALの有用性に対して肯定的な意見が比較的多い印象でした。私見ではありますが、IPF診断の最初のステップである「間質性肺炎を起こしうる既知の原因の除外（感染症など）」や、ランゲルハンス組織球症におけるCD1a陽性細胞の検出において、BALの診断的有用性は高いと思いますし、慢性過敏性肺炎や非特異的間質性肺炎（NSIP）など、ステロイド反応性が見込まれる群を診断するメリットも期待されます（Ohshimo S. AJRCCM 2009; 179:1043）。また、BALは大きな合併症のリスクも少ない検査法ですから、色々と議論するまでもなく、“Just do it!”で、まず行って良い検査法ではないかと考えています。

学会の新体制

会期中に開催された実行委員会会議では、次期学会主催地、次期会長（President/ Vice-President）の選出等が行われました。これにより、次回のWASOG・BAL合同学会は、2014年10月、トルコのイズミルで開催されることが決定しました。また、学会会長（President）は3代目のCostabel教授に代わり、4代目会長としてアメリカ・シンシナティのBaughman教授がご就任されました。そして、副会長（Vice-President）には、日本医科大学内科学講座（呼吸器・感染・

腫瘍部門）の吾妻安良太教授がご就任されました。学会の要職に日本の先生がご就任されるというのは、日本からの研究・情報を世界へ発信するため、あるいは後進育成のために、大変重要なことだと思います。トルコにおける次回のWASOG・BAL合同学会へ向けて、日本からどんな情報発信ができるか、今後ますます研鑽を積んでいきたいと思っています。

さいごに

マーストリヒトの新市街には、「マーストリヒト条約」の際に、アメリカの故レーガン大統領が訪れたという有名なチョコレート屋がありました。店先には、そのときの写真が飾ってありました。レーガン大統領はチョコレートのあまりのおいしさに感動し、その店に手紙を送ったそうです。私も、吾妻教授と一緒にその店を訪れ、家族へのお土産にチョコレートを購入し、欧州連合創設の歴史を感じながら、帰路につきました。4日間という限られた会期でしたが、大変実りの多いWASOG・BAL合同学会でした。